

詩篇46篇 「最高の神の耐震設計」

1A 自信に満ちた信頼 1-3

1B 神の呼び名 1

2B 恐れからの守り 2

3B 自然災害 3

2A 揺るがぬ神の都 4-7

1B 神の流される川 4-5

2B 国々の立ち騒ぎ 6

3B 共におられる主 7

3A 静まる国々 8-11

本文

詩篇 46 篇を開いてください、私たちの学びは先週で詩篇 45 篇まで来ました。前回の主題は、「鬱」や「落ち込み」についてでした。今日は午後に 46 篇から 50 篇までを読みたいと思います。今日は、「不安や恐れに対する安心」がテーマです。やはり、今日の社会や世界に必要な主題です。

実は、私はこの箇所を 2011 年の 3 月 13 日の日曜日に説教の箇所で使いました。そうです、東日本大震災の二日後のメッセージです。その時、私たちはお茶の水のクリスチャンセンターで土曜日の晩に礼拝を持ち、また日曜日の午後にも第二礼拝を行い始めていました。教会が始まり、礼拝が始まってまだ一か月ぐらしか経っていない時です。電車の多くも止まりましたから、なんとか参加できる人だけが参加してくださいました。

この詩篇を選んだのは 3 節があるからです。「その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。」とあります。この表現がまさに、私たちがテレビの映像で目撃した津波にそっくりだったのです。自然現象では、今年の日も大きな被害を受けています。そして 6 節には国々が立ち騒いでいるとありますが、日本国内でもまた世界でも、立ち騒ぐことが多くなっています。しかし、私たちは恐れないと大胆に発言できる、その確信に満ちた信仰を今朝は学びたいと思います。

1A 自信に満ちた信頼 1-3

1 神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。2 それゆえ、われらは恐れぬ。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。セラ

1B 神の呼び名 1

著者は、神を三つの言葉でどのような方なのかを宣言しています。「われらの避け所」「力」、そして、「苦しむとき、そこにある助け」です。

「われらの避け所」と、「我ら」と呼んでいることに注目してください。それぞれが主を自分の拠り所としているのですが、一人ではなく、私たちが共に避け所にしている、ということが大事です。箴言に、とても知恵に満ちた言葉があります。「30:24-28 この地上には小さいものが四つある。しかし、それは知恵者中の知恵者だ。蟻は力のない種族だが、夏のうちに食糧を確保する。岩だぬきは強くない種族だが、その巣を岩間に設ける。いなごには王はないが、みな隊を組んで出て行く。やもりは手でつかまえることができるが、王の宮殿にいる。」蟻は、一匹で動きません。何十匹もの蟻が、これから来ることに備えて、用意して動いています。そして、蝗は王、つまり指揮する者がいないのに、隊を組んでいるからあれだけ作物を破壊する力を持っています。チームで動くことの大切さです。そして、強い者の中に隠れて安心であることは、岩に巣を作る岩だぬきであり、そして王の宮殿にいるやもりです。主が我らの避け所という時、私たちはチームで、岩なるキリスト、そして王なるキリストの宮殿の中にいるようなものです。

私の書いたブログに貼り付けている動画で可愛い CG アニメがあります。蟻が食糧を運んで列をなしています。ところが、一番後ろにいた蟻が、後ろにいるアリクイが口でその蟻を吸い込もうとしています。吸引する強い風が吹いてきます。そこでそれに気づいた前列にいた蟻が他の仲間とすぐに合図して、蟻たちは自分たちで団子状にタッグを組むのです。それで、その団子状になった状態でアリクイの口のところに吸い付きます。それで吸い込むことができず、むしろ吸引しようとしてできないアリクイは、顔が真っ赤になって倒れてしまいました！ チームで動くことの大切さがあります。

そして「力」とあります。英語ですと、これは strength となっています。同じ「力」でも、英語で power という言葉がありますね。Strength と power の違いは、前者が内に備わっている力という意味合いがあります。主は、私たちの内なる力になってくださいます。状況が変わらなくとも、それでも耐えることができる力を与えてくださいます。牢屋の中にいるけれども、勇気を失わなかったパウロがエペソの教会の人々のためにこう祈りました。「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。(エペソ 3:16)」

そして、「苦しむとき、そこにある助け」です。大事なものは、「そこにある」ということです。私たちは、助けを呼ぶ時にどこか遠くにあるものに助けられたいと願います。けれども、主はすぐそこにおられるのです。私たちはしばしば、自分たちの外にあるもので助けを得ようとします。けれども、実は目の前にあるのに心を閉ざしてそこからは助けを得ないことがあります。

興味深い例え話があります。洪水になって、屋根の上で避難を求めているクリスチャンがいまし

た。「主よ、あなたが私の助けです。」と祈りました。それで、救命ボートが来ました。彼は断ったのです。「主が助けてくださいますから。」再び、救命ボートが来ました。やはり、主が助けてくださるからと言って断りました。そしてヘリコプターが来ました、ロープを降ろしても自分をそれに結わえつけようとしませんでした。主が助けてくださると信じていたのです。ついに彼は溺れてしまいました。天国に入りました。そして、主のところに行って文句を言ったのです。「あなたは、私が助けてくださいとお願いしたのに、聞いてくださいませんでした。」主は答えられました、「わたしは、救命ボートを二度、送った。ヘリコプターを送った。」そうです、主はすぐそばにおられる助けをもって助けてくださいます。

2B 恐れからの守り 2

主が、我らの避け所、力、そして、苦しむ時にそこにある助けであるので、2節のように、「恐れない」でいることができます。私たちは、恐れという敵が最も大きな敵であるかもしれません。水の恐怖症、高所恐怖症、閉所恐怖症など、様々な恐怖症がありますし、過去の恐ろしい経験によって、理性では何ら恐れる必要はないことを知っていても恐れてしまう、ということがあります。そして、漠然とした恐れによって、あっちに行ってみたり、こっちに行ってみたりします。恐れは、私たちに最も身近な、人を滅ぼしてしまうところの敵であります。かつて、ルーズベルト大統領は、「恐れなければいけないことは唯一、恐れることそのものだ。」と言いました。いろいろな災害や戦争において、その被害の多くが、物理的な、実際の被害ではなく、死んでしまうかもしれないという恐れによって死んでしまうことです。

聖書では、神は何度も何度も、「恐れてはならない」と語っておられます。エルサレムがアッシリヤに取り囲まれた時に、神がヒゼキヤに言われた言葉です。「イザヤは彼らに言った。「あなたがたの主君にこう言いなさい。主はこう仰せられる。『あなたが聞いたあのことは、アッシリヤの王の若い者たちがわたしを冒涇したあのことを恐れるな。(2列王 19:6)』」イザヤ書には、何度も何度も、イスラエルに対して「恐れるな」と語られます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。(41:10)」

ただし私たちは、恐れることと、注意深くすることを混同してはいけません。イエス様は、終わりの日について弟子たちに何度となく、「目を覚ましなさい、用心していなさい。」と言われました。終わりの日に起こることについて惑わされてはいけないと戒め、これこれのことが起こるから用心していなさい、目を覚ましていなさいと言われたのです。前もって、起こりうることについて心備えをするのです。

海外在住のクリスチャンの方が今の日本のエボラ熱対策について、次のようなことを言われていました。「日本は、災害王国で、災害が確実に来るとわかっている時でも、実際に何かが起こるまでは、効果的な対策をとるということが苦手である。まだ起こっていないことを想定して準備する

と言う能力にはどうも欠けているように思う。エボラ熱は、入って来てからの対策では遅い。実際に患者が発生して大騒ぎするまでに準備(空港、隔離施設の確認と医療スタッフの訓練)だけでもしておいてもらいたいと思うのだが。」全くその通りです、前もって用意をすると「そんなに騒がなくてもよい」という反発があるのです。実際に起こると最も騒ぐのは、今、安心してしまっている人々であります。

そして私たち日本人、いや人間全体は、自分の生活や人生について同じ態度でいます。キリストを信じるということは、前もって用意していることでもあります。罪によって自分は死んでいく。そして死後に、神の裁きが待っている。しかし、神は救いの道をキリストにあつて用意してくださった。神は、キリストにある和解を受け入れた者を、神の怒りから救ってくださると約束されています。そしてキリスト者は、この救いを遅すぎる前に受け取るのだ、と決めました。けれども多くの人は、「死ぬことなんて、そんな難しいことを考えてはいけない。そんなこと考えていたら、頭がおかしくなりそうだ。恐ろしい。」と言っているのですが、恐ろしいのは、実際にその時になった時です。実際にその時になった時には遅すぎるのです。

3B 自然災害 3

そして自然災害が書いてあります。なんと私たちの周りに、このことが多いでしょうか！しかし、このようなことが起こっても、私たちは揺るぐことがないというのです。私たちは、これに近い安心感を、地震対策設計に対して持っています。あれだけの地震であったのに、東日本大震災においては、地震による死者はほんの少数でありました。地震対策で、他の国の人々が建物から出てはいけないという指示がどうしても信じられないというのは、よく理解できます。こんな厳しい耐震基準は、世界でたぶん日本以外にはないでしょう。しかし、終わりの日にはそれでも倒れてしまうような大きな地殻変動が起こります。

2A 揺るがぬ神の都 4-7

しかし、私たちキリスト者はもっとすぐれた耐震設計を持っています。

1B 神の流される川 4-5

4 川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。5 神はそのまなかになし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。

この詩歌の背景は、アッシリヤという大軍が、エルサレムの小さな都を取り囲んだ時のものであると言われています。その都とは、細長い丘で長さは一キロあるでしょうか。とにかく小さいです。そこに川があるのか、と思われるところなのですが、実はふもとにギホンの泉という泉があります。けれども、それは城壁の外にあったので、ヒゼキヤは地下水道を敷いて、城内にあるシロアムの池まで引いて来ました。

先ほどの 2-3 節の水が増えてくる描写は、実際の水だけでなく、アッシリヤ軍が押し寄せてくることの形容でもあるという人たちがいます。確かにそうでしょう、イザヤ書 8 章にはアッシリヤ軍のイスラエルの地への進出を大洪水として形容しているのです。しかし、この都はびくともしません。なぜなら、そこには神がその真ん中におられるからです。事実、ここに書いてあるように、夜明け前、主の使いがアッシリヤ軍 18 万 5 千人を一夜にして打ち殺しました。

聖書には、この天地は過ぎ去ることを預言しています。今、これまで以上の自然災害や地殻変動、また隕石が落ちてきたり、月が赤色に変化したりと天変地異の兆しが出て来ています。聖書は、地が揺り動かされるだけでなく、天も揺り動かされることを預言しています。しかし、そのすべての天地が過ぎ去っても、微動だにしない国が用意されており、それが天にあるエルサレムであると聖書は預言しています。「私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。(ヘブル 12:28)」そしてイエス様は、「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。(マタイ 24:36)」と言われました。

そこには都の中央から生ける水の川が流れています。「御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。(黙示 22:1-2)」すばらしいですね、ですからこの詩篇の約束は、新しいエルサレム、私たちキリスト者が永遠に住むところの神の都を表しています。

そして私たちは、霊的にこの都を心の中に宿しています。イエス様はサマリヤの女に言われました。「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。(ヨハネ 4:14)」私たちの内に、生ける水の川が流れ出ています。それはまるで、エルサレムに流れていた、ギホンの泉から出ていた小さな川のような存在かもしれません。そして、世においては、アッシリヤ軍のような恐ろしい洪水のような水が流れているかもしれません。私たちはまさに、そのような洪水のような流れにあっても、なおのこと小さな命の水が流れている神の都を、心に宿していることができるのです。

この川は小さいので、私たちはないがしろにしがちです。イエス様ご自身が流しておられる命の水をないがしろにして、自分の生活で起こっている大きな川を見てしまうのです。そして、世の人と何ら変わりなくその大きな川をせき止めようと、焦り、慌てふためくのです。けれども、私たちを守られるのは、小さな川を流してくださっている神ご自身なのです。

2B 国々の立ち騒ぎ 6

6 国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいた。神が御声を発せられると、地は溶けた。7 万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりである。セラ

自然災害が世界各地で、日本国内で起こっていますが、同じように騒動が世界各地で、そして日本国内でも起こっています。日本は騒いでいます。これから経済がどうなるのか分からない時に大地震があり、原発事故に見舞われ、ますます日本の経済基盤が壊されてしまいました。そして、政治も次がどうなるのか分からない状態です。何か不気味なことが起こるのではないかという予感がして、大きな台風が近づいているような不気味さであります。

そして世界では、大騒動が起こっています。先ほどエボラ熱の話をしました、これは起こるものであるとイエス様は言われました。「大地震があり、方々に疫病やききんが起り、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。(ルカ 21:11)」そして、他にもますます聖書の舞台のように戻っている姿を見ます。私が最も注視しているのはイスラム国であります。百年ぐらい前、欧米列強が今の世界秩序を築き、すべての世界体制が今の姿になりました。近代国家と言われるのがそうで、日本は明治維新の時に江戸幕府を閉じてからその中に入りました。百年ぐらい前に、中東ではその線引きが行われたのです。

それを根底から覆したのが、今のイスラム国です。シリアとイラクの国境線の上をまたいだイスラム国の戦闘員が、それを最も象徴づけています。そして彼らの手法が、まさに近代以前のものであり、十字架刑や首切り、奴隷化など残虐極まりないものです。これらの事柄はすべて、実は聖書の舞台で起こっているであります。イラク北部はまさに、かつてのアッシリヤの中心部です。キリスト教徒が千年以上も住んでいたモスルという町は、アッシリヤの首都ニネベの遺跡があるところです。そして彼らの使っている残虐手段は、まさにかつてアッシリヤが被征服民に対して使っていた手法に非常に似ています。ついでに、クルド人は聖書的にはメディア人だったという人もいます。メディア国は今のクルド人の住んでいる所にいました。

しかし今、恐れさせるために話しているのではありません。むしろ、これらのことは初めからイエス様が語っておられたこと、そして必ず起こることだと前もって教えてくださっていたことです。目を覚ますため、用心するための徴です。主が間もなく戻ってこられます。そして大事なものは、主は必ずこれらの騒ぎをやめさせることです。「神が御声を発せられると、地は溶けた。」とあります。先ほど、水かさが地上に増して揺れ動くという形容がありましたが、その水を一気に天からの火で吹き飛ばし、地を溶かすほどにすることです。かつてエリヤが、いけにえに水をかけなさい、そして溝を周りに掘りなさい、そこにも水がいっぱいになるようにしなさいと言って、そして祈ると天から火が降ってきて、水のすべてを飲み込んでしまいました。それと同じようなことを、主はこれら騒ぐ者たちに対して行なわれます。

3B 共におられる主 7

私たちはだから、安心です。主はどんなに恐ろしい、おぞましいことが私たちに迫ろうとも、それに戦ってくださるのです。そして、主は私たちと共にいてくださいます。ご自分のことを、「万軍の主」と呼ばれています。万もいる軍ということですが、それは天使の軍隊のことです。天においては、

星のように無数の使いがいます。その一人が動けば、一つの国を動かすことのできるほどの権限の与えられた者もいます。そうした天使が無数にいて、その将軍であられるのが私たちの主です。その方が私たちと共におられます。

それだけでは、ありません。神は、私たちの弱さにその全能の力を働かせます。「ヤコブの神」とあります。ヤコブというのは、「かかとをつかむ者」という意味です。彼は、エサウから長子の権利を奪い、ヤコブを殺そうとしていたエサウから逃れて、母リベカの親戚の家でずっと過ごしていた人間です。そして故郷に戻る時に、エサウが向かってきていると聞いて、恐れをなして主に祈った人間です。こうした弱さを持っているヤコブに、主はマハナイムと呼ばれる、天使の軍隊を与えられ、エサウと平和裏に会うことができるようにしてくださいました。私たちは、弱い時に、恐れ戸惑っている時に、その時にこそ主がご自身の力を現してくださいます。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。(2コリント 12:9)」

3A 静まる国々 8-11

最後はざっとだけ見ましょう。

8 来て、主のみわざを見よ。主は地に荒廃をもたらされた。9 主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。10 「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」11 万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ

これは主が戻ってこられる時の、ハルマゲドンの戦いの預言です。戦いをやめさせるために、主はこれら騒ぎ立てる軍隊を滅ぼしてしまわれます。大事なのは 10 節の言葉です。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」です。騒いでいるのは、神を認めていないからです。この方がすべての神であり、すべての主であることを認めないので、騒いでいます。私たちの心はどうでしょうか？ 命の泉から離れて、騒いでしまっているでしょうか？ この世の人々のように、目を神から離して、自分勝手になっていないでしょうか？ 主が共におられるのです。主が神の都を私たちの心に、命の水によって留めておられるのです。そして、将来、実際の神の都を私たちにもたらしてくださいます。